

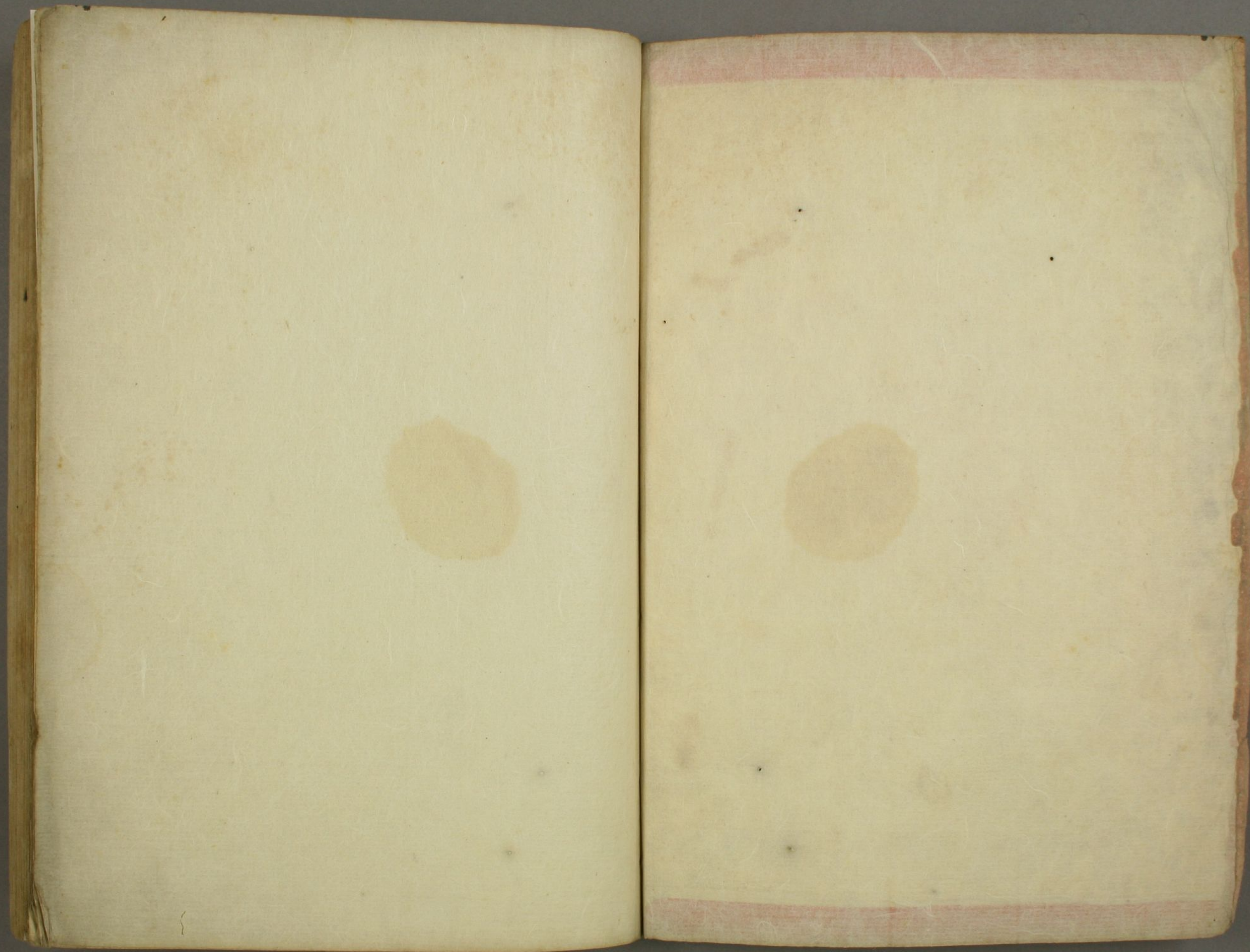


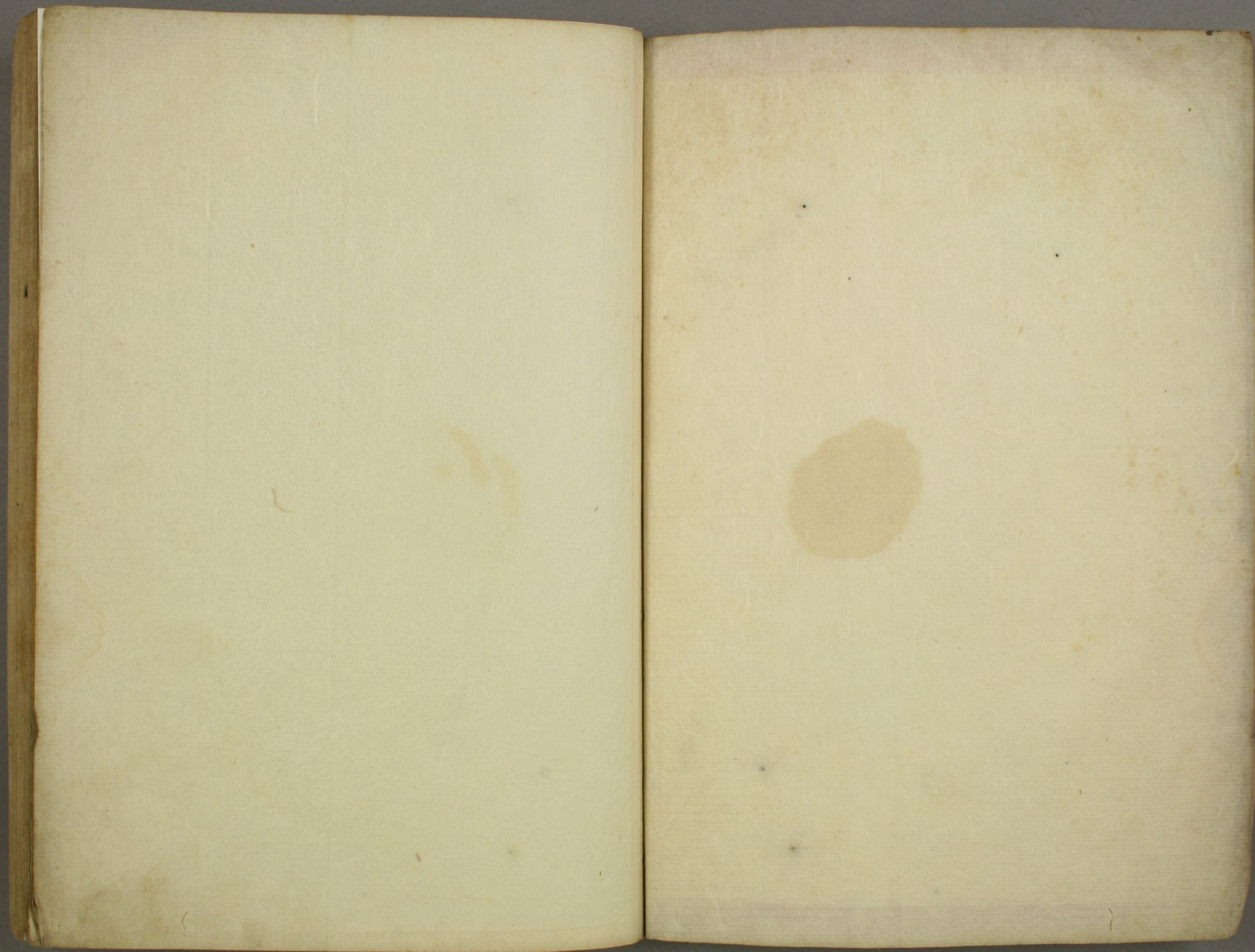
連歌釋善全集

全

中村俊定文庫
文庫 18
29









有人の云春夏秋を母の年て有秋草木枯らうり
 而後霜雪の降るは秋と奇れ題の事には志有りて
 散句の淫色も成極く初学の人心付題とれ然るに
 交はに如く久米は思ひこり石見の海のあり
 書法へそ各莖の物も思ひつる事と如く堀川
 の院の百首は題成りあて古方の法也斗とて
 と先づのり母如く抑留白れ思案をばとむめく
 らととつ傳ふるやまもいへん古今の古玉の物は



のこぼれ涙も一洗思をいはいくこととを代上下より
身より出まうして互よんの色とみえうー詞の想を
ちくちくといふるを懐く海くぬゆくるとして法を
い物とあうとふり増えれ期をいふと世はいさ何
はあも不及母念の奉也とていふ母及の和國の風
俗もいふ世とたふ絶へうと後生をいふとていふ
侍小具器等もいふと絶へうと後生をいふとていふ
うきもく自埋はゆへにや侍とん種古流のいふそ
水を揚うくくふ絶えいふと絶えいふとていふを
わくは絶えのいふいふとていふ侍とん種とていふ

なうううううんぬつあては古来れ絶えあること
志る一付侍も同類を引いんきりよとせ好去れん
をいふをいふとていふへいふとていふとていふと
離れ絶え名不尺教神紙と下の散る其席より
てんつとていふとていふとていふとていふと
あうとていふとていふとていふとていふと
いふとていふとていふとていふとていふと
乃吾事とていふとていふとていふとていふと
多絶へいふとていふとていふとていふと
絶えとていふとていふとていふとていふと
絶えとていふとていふとていふとていふと

朗詠橋在列
折梅花而掉頭
二月之雪落衣

残雪大畧同一時分たうぬ水ハ三春より二月
中
ひまひましく風情をへし残雪ハ二月未つ了とて
梅ハ旧年より咲きのちや狂決やけくや伊セ物語彼西對
花月の後母睦月梅の形望もくも二月雪落衣
とみ詩をく眼あけの時さ迄とれと奉にり示さる
つきて是速き春なるく冬の梅咲き心非京祇仁
まり梅母限くは是ホもてかあまへし一子廢去る
梅有く又同一かく主集上廢るく散るに朽をゆき
こころのこころや春草ハ花とのこけん人ふ心
まのちるされ草のま成見をりやるくよみり雪盡

山谷詩集第廿六
次韻高子勉

文集 白居易
押無氣力條先動

元稹
冰消田地芦錐短
春入一一一低

詞花春 重之
春日の母物新の
お春は君の情を

虚簷滴春從細草回と山谷此も歌も睦月此末二月
の始のりくくむとゆ急の梅は三春の詩母押無氣
力と此もるく子春は起りく春入枝條押眼垂り
あましく初春の母懐色きにあらはれりも蒸菜の巻ふ
二月中十日斗の梅うつり母志るり初春もくん地
しとく書たはく是等もて時分の此急とわく
へ我もや雜子ゆる雲霞ホの類雜子の雪れ消る
蒸菜つれくく徳も初春にけいし一もく
月母わくもあやさくもゆるは二月の此をわく
ちるにやせ霞ハ二月の此をせんもく一胡鷹持

花侍の糸の巻作の雨さしけし母愛甲好るもの
ととをたすをさすすれをうさうみえ侍りしはか人う
ききて天をうさうはあゝとて再誓ひ世をうへ
第本此巻よ木の尾信不手紙なすこに人のうさ
をさすてく書教と作意の用控ぬをさすや花
は初春より愛春留て人の批んまのまれの初
多るる人―批の花をさす此の巻自然とてくや
そのお董着の吹心梨雲躑躅あ後まて大畧と
月守るる人―椿の雛の題や花をさすてく春
に如く―や習―たり今以てさすれや国と月

同二月巻木の巻実時ぬあう見―世起たの月
と子乃仕儀―たう物はさすはとを河つふ方安る
有備とて記か―とる―侍り

春巻の

立春

月の花の巻と歌うあ―宗紙
新玉枝折はるる―心致

子日

起りか松の内思ん花は宗紙
宗紙

種を地根うとみの二葉うな 心教
わさし押る神うひくうの相義 全
をうと母うと心一木中相う分 香頌
まうしとみえわや中乃相義 宗紙
義立を心のうの相うのう教 全
えととまわぬを心うの重為履 全
物みく自立増う何うと教義 肯拍
唯乃をうひくうとありと 全

眞

黄多やとととふあわやうと 宗紙

うくひまの樹くわし心取うを 肯拍

若菜

心城のこつじと海の若菜心 心教

残書

相原伊賀入道

意心の徳まきやゆに同うな 賢盛
松の葉は霜や押りきとる心 心教
浅うりや所人まけ高る 總持坊 行助
を躬は海く若し香の介の心 宗長
残書ふいささうへうと 春の香 兼載
そくたさうし法書取る心法 肯拍

新
山のふもとにむやみ残るをば 宗祇
消えて花の友はゆく 峯村雪 全

梅

大内意太夫良

新
花を梅のふしかりゆく 東山 政弘撰
日
待くよまをやくまむの梅 兼載
うめうり歌 翠川也 梅のくれ 賢盛
梅つづく白ひくく 好白 朝 嘉 吉頃

東山の梅 三月十日

梅の枝 同人 ありや 苔の色 心敬

余宗の幸初 函て 翌年 名宗のまよ

高山民部入道
もろの香子 白へ 蓬々 中一の梅 宗祇
いづくか 色さへ 香色へ 梅のむ 宗長
梅うよ 白をてて みる花か 宗碩
白妙の梅 白のうき 白ひく 宗祇
梅うま 衣まき 袖の夕月 宗 全
うめ の たれり かなと 先ゆ 月 宗 全
梅のつ たる 花を け白ひく 宗 全
まろく 知人 あり 中一の梅 全
ゆき ちり 母 咲く 色 押し 花 梅 肖柏
神 しく 昔 宗 白へ 梅の 全

桺

若綴りし思ひ言はれ柳うま 宗砥

新 枝より里のやまのしり 春の心を 全

風やそ吹くもつらふ枝うま 宗長

夜もそせんと春の柳の非 宵柏

吹しそいふやうく風の枝うま 宗砥

東へちりる人のふるふさし 弟七 時の

多し

新 春をせぬ人あつふ柳をきくうま 宗砥

さうせし花と柳のあつふ柳うま 宗砥

いさゝね月急海に乃柳うま 全

追憶 敬濟 一筆

春をせぬくや宿の玉柳 全

早蕨

紫れちりしとまはれわし心 宗砥

嵯川親當

智蘆

橋

誰と世の待人あせん春はれ 宗砥

橋嘆心さへ磯の又れわらう 智蘆

さしあつて嘆くもそまはれ 智頂

さしあつて嘆くもそまはれ 宗砥

待ゆきふきの花うら山櫻 宗福
 まつしつはしつふ花の色香が 兼載
 山櫻よそや都乃花 宗福
 屯子春ゆくう海ふう妙を櫻 宗福
 日たそくく喜代ふみぬき櫻 道生
 侍をりまや妙花朝うとみ 宗福
 侍をり妙ひりうとま櫻 宗福
 山見とて家やうる乃相是 宗福
 面晴くはくくは是る河う 宗元
 為家花ふ二あひの夜う程 肖柏

王

新 身や知つくわさううんさう 宗福
 新 花乃まき母さひの消を相を 宗福
 新 所のみ一花う香帰朝うとみ 心敬
 さくくくさ母ふはうら新ひ白 全
 大新まき母系福一侍をり一 時子白牙一
 日たそくくはしつふ花の色香が 全
 屯一木うらぬ都乃花うら 智慮
 さくくく候をうまやうとま 宗福
 わの若き母花の色香ふま 宗福
 白雲をうらまやうは花の盛 肖柏

新 あをよふ春や花の鳥よふ 宵拍
 新 ち〜まは〜るるや〜こむ筆 宗紙
 花盛るあま〜あふ〜る〜 今
 新 花盛るあま〜あふ〜る〜 今
 月よ〜しよ〜や花〜る春は〜 行船
 咲出〜るゆも〜は〜る〜心さ〜 兼載
 唯及を心さ〜る〜る〜る〜 宗長
 花は月心は〜〜は〜る〜る〜 宗初
 郭公は〜〜を〜知〜る〜心〜角 宗碩
 花よ〜る〜花よ〜る〜花よ〜る〜 宗高

王

ちね月よ春あま〜る〜る〜 宗紙
 ち〜る〜候春は〜る〜る〜る〜 兼載
 林〜る〜る〜花〜る〜花〜る〜 宗紙
 花よ〜る〜花よ〜る〜花よ〜る〜 今
 時毎母を心さ〜りし花の子入哉 心致
 新 花よ〜る〜花よ〜る〜花よ〜る〜 今
 日 ちね花よ〜る〜花よ〜る〜花よ〜る〜 今
 醍醐 醍醐 醍醐 醍醐 醍醐 醍醐 醍醐 醍醐 醍醐 醍醐
 ちね花のま〜る〜る〜る〜る〜 今
 柳尾〜〜〜細川在宗能〜〜〜水〜一〜

新 花の香は心にしきこころ心致
 日 花はく小無縁寺に後成 全
 人いらる起はくを揃く夕々 全
 新 咲くらるるるるるる花も非 宗頂
 ころる此有世らるる花をうら 宗後
 り花をのこ世のりの春の花 全
 ちくはゆめ花のわさく春の色を 全
 花のうらみり花のりり 全
 吹く香をゆきは花の気 宗 永仙
 長谷寺の花の気はゆるるるる

ちくは宗尾上はる緑乃夕々 宗長
 風や種ゆくく浪のさく 宗牧
 敬安ま花のりり花のりり 宗頂
 ゆらん春らん春抄り人花さく 全
 花うら花のりらんを此色香非 兼載
 春 春 春
 朝露のりりるるるる 賢感
 春のりりりりりりりり 兼載
 むりりりり春の色を心へる 宗後
 帰 帰

有るるあぢ浪はむ候まの海 宗祇
みつゆく厚いころの花あり 全

萱葉

さくらつ物ゆきいれぬ萱の非 全
つらつら人萱や春のむく見え 宵柏

雛子

あつくと胡麻拂ひぬと非 全

雲雀

夕ぞ雀芝の成むのなむり非 全

藤

紫母さひや遠枝のしらぬれ 行助
氣味く折し道ぬ波を花はし 全
秘んみ新と紫の折し氣のむ 全
折袖やこ地もるをうらの苑 宵柏
はくくしら折世やわ感氣の氣 兼載
陣ふきつや若枝のゆらぬ 全
若浪のねや岸もふかろを 宗祇
折母氣ち地りふくゆるはし 宗祇
浪とをむら折やびのあゑのむ 全

山吹

今又能てうう心物さけゆく由 宗祇

二月廿

任者法宗

かへるもこれ忘るまつり乃春 全

あまのいさくもかえりてふの春 宵柏

念落て多留春のわかれも 賢盛

をらやあまのいさくもかえりてふの春 友真

蘇つて春りやぬら修るも 宵柏

雜春題

燕

る乃日をわくも形もは燕も由 全

梨

るやもくも心梨の内物りあり 全

春草

落すもそふわくも若葉はらまぬ 心教

恙草の身も一ふ二葉の内松もか 智蘆

大草乃の秋のいろも小草もか 宗祇

椿

川上は花や下砂もみ玉 椿 全

く歌つく代もくくはら玉 椿 全

花の春は鐘とくふう南 三善 尚武
 名をみし春やと海とんふし 在唐大夫派 政光
 神花もまことふふふいれ 兼載
 今

夏

一文の表のまゆとふふ人一時多のいりて力め
 けと大男とくし次母知をり知れ二百よりとへ
格遣りの上
 志るるもてふふと名の新郭と先春ととく

うつわに世もく後又 知母知り出くふく
 郭と新南備心のくくは西てふゆとくく
 時よりありありとくく定無物くく先は五月
 中ゆへ一卯花杜若夢牡丹なと卯月の中
 には夢の糸の先後とてとや杜若の堀川院
 百首の春は題の知をり又郭とを夢は次
 あり明題一核とくくはとくくはとくくは
 其題の堀川院をくくを郭と牡丹の海と
 其廿日牡丹と名とをくくはとくくはとくくは
 其くは風流と歌名とを中侍る 團は茶大政大臣 嘆くくはとくくは

壬生集中

早ふ海々くみ〜花の〜あて甘日魚
々り世舞朝花は春共都に入るま〜
そ夏の所〜つりも〜葛藤の苗日斗
限〜ひ子苗ありを印す魚〜
卯月末つ〜ふり〜ま百合の
名〜つ〜卯月終る物也口卯の花
いん及ひ侍〜舞は名ありあり松双紙
る〜は入る〜又ふり〜
は〜花は〜ある世う動行冊法印の
信〜や世の是侍〜と辨るるあるも下時分と

さ〜の〜卯月咲物也照射蚊巻史乞
乃懸愛るはは〜の仕らん〜
橋の卯月と布〜野堂水鶏な〜
四月の末つ〜卯月を〜
氷室の六月一日の卯月自然と〜
冬卯月のは〜卯月〜
泉海雲夕鳥〜卯月〜
鳥の晩るあり〜卯月のおち切る〜
ろをあらつ〜卯月〜
卯月〜卯月下白〜

後撰及よみよみ

子細るきり、
か茂川のなげほくは月をゆく
えんや夏枝と秋と諸家能奇如へー 雲を
日とふりよめふは枝何家紙夏白也たー是
ハ仲長枝のころるも何秋もや尋ねへー

夏夏白

更衣

とくきをそまのこぬねるな 宗紙
心娘のきひやうや夏夏白也

卯花

お道雲卯花月心さくく 今

卯花不月雪をうらな秋也 今

うらなるの月がくさくさ秋也 智彦
詠里と卯花ゆふふ秋つる 宗長

あふひ

むふ日もはくさくさ秋也 宗紙
向ふ日暮る後秋をくあふひ秋 宗長

郭公

新
かきこひ花をゆらふさくさ秋也
まきこひさくさ秋也 郭公 宗紙
ちびりさくさ秋郭公 避さくさ 今

紅糸をなす月をけりるをばあはる
五月の月をいれしは
さか山やありぬれ雲の尾尾
晴したるはありぬれ雲の尾尾
五月の月をいれしは
さか山やありぬれ雲の尾尾
晴したるはありぬれ雲の尾尾
五月の月をいれしは
さか山やありぬれ雲の尾尾
晴したるはありぬれ雲の尾尾

五橋

橋のわたりすしききりしうか
そら花を拂ひけりるをばあはる
心教

萱押
何れの風か
しづかに
秋空のこころ

橋ふりしはけりるをばあはる
心教

量

うとふはるまゝえぬをばあはる
心教

蓮

花をいれしは
さか山やありぬれ雲の尾尾
晴したるはありぬれ雲の尾尾
五月の月をいれしは
さか山やありぬれ雲の尾尾
晴したるはありぬれ雲の尾尾

道楽成行りうらむ白く紙 宗祇

書室

乙越政や初らくくい書室座り全
ありきき心は書室の名残る全

泉

新
よ新りくわ月はつらとれ夕をこ
ぬきらくをうめい泉の玉うい宵松

徳州七尾の松

わらうとやうあまうらとれ松 宗碩
夏、消林あうらう泉う由 宗長

下路色つり新やうらし庭の松 宗祇
本にたむく地やよみあはる泉 全

恙和枝

そととをちうふすし山枝河 全
山枝河あ地やたら枝乃相涼 全
しのもをちれわをこる山枝河 全

雑文題

新樹

新
花洲りあ葉もこき梢う非 宗碩
花の枝をかく如白もの夏本立 智蘆

形 杖はまききんをひらつてさうな人致
 茂ふほく杖の柴くらねるひる全
 茂りり中母一葉の花もくむ 宗祇
 深山路や茂れかつり歌房柴か 宵柏
 南うしてねるくさるる花もか 愚載
 花もくく茂ふく山本末う如 宗祇

牡丹

根やしんろ若う地つくと、根の夏 宗長
 手おるく想やゆい神一牡丹 宗祇
 咲くさうく葉のうきつくと、全

牡丹

春はくね花やうららの花と子 兼載
 草の名のうらと母すじ花の露 宗祇

美竹

六く生い管好よ竹れ母う南 宗祇
 花はくぬ竹ももつらむあさうな 全
 こく生くさ竹や代くの友 全

宗祇草庵を結て娘くの一すふ

茂きく世くくくくくくくくくく 賢威
 標

柳をうを傳へく白ふあもら我 宗紙
露落く朝うとにわく標う白 全
下露もきりくこきあわら我 全

百合草

茂くにも花冬うくあはゆ我 全
くあ秋うああゆく花の露 全

瞿麦

^お小松生梅子出をふ思わく白 智蘆
あ鳥の座あさう秋思わく我 永僊
あゆゆ花や梅子白ゆくを白 宵柏

あな母あくやソ那う花のうね 宗長
梅子あな朝思はく一電の露 宗紙
あふらふ朝露きし石井井 全
常妻小あなうく花のた絲 全

末摘花

あふゆ末摘のこをさ乃露 全

水鶏

くあふ啼指はく地のうひる 全

蝶

あみのあやあさうつてあまうり 宗長

隱きく—南の—心水の何 宗紙

秋

一五秋の散りけりふ依ある處うひ一葉を相物と
さうそくしるるたじしつる乃木葉をそくしる
葉落天下知秋と云はれ立秋の日よりいす人—七夕
當日定ぬりしは道しる氣日又八日の云々—はま
とく—や塘川百さる—萩女郎花前堂若木
萩うけはやく次身せりたう—散り—う萩を物

秋身はまらるる眼お初風を拓き—又涼をうめたる
お也蛸喚交—乃物多し—勿偏萩—月—時かな
ふへ—さくも木うし—さくもを讀み—ふ弄
侍—他忘次身言秋—と及處—又本枯は喚秋
初そのおひり—^{老葉}本枯乃物—と—一葉—南
葉紙うく侍—る—を—一—萩—葉—一—
は—心—迷—言—他—忘—り—も—花—の—葉—を—う—り—と—
女郎花又媚—く—風情を—や—と—
古來の散る—よ—の—も—と—
ま—く—向—く—は—萩—を—う—り—と—

へそ魚一薄又萩母地下草萩為んを
 まくくしん杖もけ一宗祇そ又賢作まや 人いふ
 萩を杖とふふふ萩はまじ地う人を杖とわつんと
 清ふ古事しりりひいよま萩魚一か否の五極
 是等しそん付へ一前萱乃面白とあそ多うしん
土生集上
 うふらわ乃男又まはる舞道しそんくさうま
 萩下折ともまそ萩為の解りに化念も多。
 萩と蘭名をむつしきそ也宗祇乃面白は
 あまうそんてゆり厚麻落芳物良約近月依
 出羽葉菊九月也この題しそんま古実そま

乃は十五萩乃月みらふうしんひ習しそんは萩
 のまうは晩萩もそんハ少そそそや不後乃のらる
 ころそ花も面白くそそそ意也麻ハ早杖より晩
 杖ふあそ一萩落芳權日あそそそ其物よらま
 之中感情深き時言てまか麻ハまを編てまをそ
 物かそ萩を泥とせりそ一古所金葉冬 法印光清何てそ母杖果か
 うそそそ一あのおひいそそ書と意そ人拾遺冬并そ
 月時多そあそ一葛のそ杖うそそそ萩者母麻も也
 世等乃そもうらゆそそそそ写そそそそ物也
 落しやそそそそそ物そそそ萩のそそそそそ

甚感懐深きゆへ也初秋よりハ夜を此相夜な
 くと申とせふやや旁ハ初霜結をほしと懸る朝
 儀ハ之増るややハ秋初霜をなはしとくハぬふ
 しのくハ美葉ふ書たふハ末ハ秋ハ是く侍り
 初霜ハ暖るより候物好くハ申秋をなはしとくハ
 次中ハ好る相とくハ母方ハ此後冬とくハる物也
 初霜ハ黄白ハつとくハ人候侍とくハ古キ日發白と
 けはつとくハも何ふ候とくハ月ハ春の花の極り
 候ふ極き物とくハ毎日此言とくハはつとくハ人
 や是ハ抄りハ作る日ハ夜ハ仕とくハるハ候

年ハ稀るふゆへ也播衣ハ黄白多きハ侍ハ次
 出ハ秋ハつとくハ候ハ名ハ出とくハ侍者ハ
 候ハとくハ人ハを候ハ地物とくハ兼ハ九日
 美ハ小ハとくハぬ名ハ出ハとくハ母方ハ初霜
 ハ七ハ月ハ物也樹ハ初秋様極ハ言秋ハ人ハ
 葛葉思草思草ハ芦の花箱ハ玉ハ秋ハ言ハ小
 候とくハ秋ハ京物侍ハとくハ候とくハ物ハ求
 美ハ女ハとくハとくハ候とくハ候とくハ候

秋黄白

立秋

書書少とたりや初のうすお杖 宗紙
柳ゆく風了杖をりみやこころ 全
とくーさやううう夜ううう娘 宵松

七夕

新
初とや七のりけあさころも 心教
杖ををううみぬ星の舞うふ 切助
りさるふ二藍とくと夜うれ 守氏
き一乗とせふり乃夜お 宗七
月とすわりあひ思ふ天の川 宵松
ふのさるありぬ契天の河 宗紙

夏物一葉やりの運少紙 全

萩

色心はさうう唱し萩ううれ 心教
萩と備いむう面すし萩の露 宵松
錦うと玉やふ草う萩のつゆ 兼教
そくやうふ天性る萩の家 宗碩
杖うをのうねや白し萩う花 宗紙
露ううううあうい押し萩う全

萩

世分し神うを詠なき花とて人致

秋のつらき柑落るひく蔭のれ 宗祇
玉をよもよもうらや露中ん花為 全

ひふらや

起てらんよ秋やうらるや露のや 全

蘭

露やまらひ世をうとさ此茶 全

あや玉花のよを引着くう海 肖柏

萩

ま風やうらまはゆく萩のあり 孝順

ねくせもあまうらまはを萩のあり 宗祇

伊せうえのわらうらに
くさ萩の風やうらまはのあり 新物

乃

^新一尋母沈や乃おくよ乃乃月 肖松

^旧楊ちり里乃乃絲さじき川也これ 人教

相のふ不待うらん考や乃のあり 宗祇

麻

麻のま成さうひいひやうと知ふ 全

あま其音を胡夕旁のり地卦 宗長

更ぬあま月小麻帰つ田くま 肖柏

落

吹しそへ落やほまうれ秋のくも 宗祇

旁

下草とてんあをきつまの梢う角 宗碩

滝半きかふるも落く心志好し 心教

胡弓や浪の上なる秋虫うえ 宗長

名をききしはる胡弓の名残也 全

胡弓りれ松やうに雨秋の海 宗祇

槿

ひよりけりけり此秋魚のけり 宗砌

宗祇は沙一也追書

胡弓やはさし付らうの夏 宗長

落をこころあけ秋虫の色うけ 宗祇

秋顔を七月うめよ宗の落 全

月

三井寺めぐ

夕月秋海はさしあら来たるか 宗碩

月や秋来のるれかのおもひ 宗長

月夜まじし落をこころけり秋のあ 宗祇

久しれ心ころりあきけり 宗祇

六神ふは樂

非代のともかくやすあはと秋の月 宗紙
光る月いなりしのをさす 全
月ふきき推の葉さしきさ 全
月いさきさ心多のくみ我 智蘆
島母数多年とさし一月とさく
月よこひ月ふわさる 都久丸 人致
八月十七日
月さしとせはさ中此秋の光 智頂
名や白ひ月の花咲草木丸 肖柏

彩 日
よふちふ光や月の秋の花 賢威
名や光るひ月の月さる 宗初

月やあやぬいふ時無さし 全
詠つ月母やとあふさし 人致
月うさし人いささし 全

彩 日
月秋あきはさ青れし 政弘
名や月あふさささし 兼教
月さしひ月捨えん法うれ 宗次
月ささし名は秋より代々の秋 宗長
名うささし月やささし 宗紙

名と母の入りしるる秋の月 宗祇

系極美の善不母々々

^野あきけは又しつゝいふし秋のうら 全

九月十三日

うき名と母の入りしるる秋の月 宗祇
秋のうらなはるる花葉月さうり
月いたをてるる原野の二よう那 賢哉
名と母の入りしるる秋の月 宗祇
玉うらあきとわらふ月共二ん 宗祇
名と母の入りしるる秋の月 宗祇

秋を月守母の入りしるる秋の月 全

虫

名母の連歌

鳴母の神の森そふとまき那 全

紅葉

白川の園々々

美を園々々々々秋の梢々角ん致
極美をふさうとせりれ立枝外 宗祇
色卵母のうらな神のうら 智彦
深はれうと那のうらうら 賢哉



鏡傳ふお落帝中杖のふか——
 子入るや落の深らん為紅葉 宗祇
 山姫の深る——ふさる落お葉 兼載
 山姫の深るの母もね枝うらと花 宗祇
 山姫も深るの母もね枝うらと花 全
 袖くさ深ておと海う山巡り 宗長
 袖ましよらうらうその下お葉 宵柏
 あ——明杖のんうすき夕日くれ 宗祇
 菊
 為さるやあ——うらう杖の葉 宵柏



秋
 庭母も心もや珍く咲若杖を後 宗祇
 又やらんうら九葉の杖のま—— 宗祇
 年唐のうら系流やま——杖のま 宗祇
 男をうらうらうらうら杖の葉全
 うらうらね葉やあさる天の星全

九月廿

秋のりさ——うら免下紅葉 宗祇
 月ふたら——杖のうら母葉より 宗祇
 雜秋題

秋秋

え凍るふ物も色也野鴨の敷い勿備とけり名何る
ある事あふぬ侍もいふ人歌目ふう人ふ物とをいふ
あゝぬ物と存侍といふもいふ也へ凍り十月廿
八日一記云お美事未だおはれしむいひゆて
まはるにともふあつとい定備もふ時おあへん
あゝ〜つ〜た歌をいふ也〜さ又〜つとさ
〜はあ〜〜き月夜はあふんや〜い〜い山
小色意れ是竹とてふもいふ白き一物〜をいふ
〜う〜歌へ〜 貴地乃あや物といふ〜歌の
宗御は少の貴白くや切まのあはえは〜人

方へ返れふ貴白切まは〜書歌の所来とけり大
れ〜い〜えは〜い〜ぬふ侍〜い〜し〜南
浦〜れ切まは〜い〜い〜は〜無〜侍り中
古は親
摸のや〜に〜侍れ〜人秀逸の貴白はは〜に
え〜い〜也自然の〜也〜一人の不審か〜切
字平〜い〜ふ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
ふ〜い〜実書の時ふ〜い〜名実〜い〜い〜
あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
あや九月あはれ〜い〜言渡侍り〜時

秋の神の言は心能所 秋の神はまゆりかき今
朝の言はしつふ愛白新機能集みえ侍り時
あつらひく名譽のこゝろをいふ時
ぬ花候紅葉と秋の侍りやうけ合席ふのこゝろ
さ中道時の他なきしつらふ人のささふとそん
まき下の事にはさうりかゝる人の年立斗れ秋は
博しつれ色きしつらふ炭竈埋火のさうりか
しつらふしつらふしつらふは世等の趣は用家
くくきつらふ世の舊持るしつらふとそんや秋の
さ白の巻軸に定むし秋のうらつらふとそん

かく色きつらふ也子梅も果は散るにきと白ひも
ぬへしつらふを求んしつらふ桂の一枝ぬへしつらふ
題向あつらひの巻軸に名を述べはしつらふとそん
くさつらふしつらふしつらふしつらふ

みまむ

秋冬

うつらふて葉もくつらふしつらふ 宗紙
秋の色をいふしつらふしつらふ 全

時句

春秋を記のふのそれしつらふ 全

ちりちり〜と知無成りたる薨る 宗碩
宗山とくちりちりたるの神を月 宗祇
とるはれとちりちりたるは 宗祇 全
神を月との見と知無成りたる 智蘊
枝もれありの本枝と知の元 宗初
りりちりちりのたちりちりたる 宗初

残菊

枝を菊とくちりちりたるは 宗祇
みとくちりちりたるは 宗祇 全

本枝

木くじの産はとみらけ子種也 全
本枝母とくちりちりたるは 全

雲

多母とくちりちりたるは 宗初
雲とくちりちりたるは 宗長
産不消と根母つとる雲かな 賢盛
とくちりちりたるは 宗祇
夕は日とくちりちりたるは 宗初
降降とくちりちりたるは 宗初

早梅

春の気もさかしく梅の花
 今 政弘
 一花と云ふ候梅乃さうり
 今 宗祇
 春の気もさかしく梅の花
 今 宗祇
 春の気もさかしく梅の花
 今 宗祇
 春の気もさかしく梅の花
 今 宗祇

形 白雪の光もさかしく梅の花
 今 宗長
 春の気もさかしく梅の花
 今 宗祇
 春の気もさかしく梅の花
 今 宗祇
 春の気もさかしく梅の花
 今 宗祇

右段のあまは後集集竹母たうあを尋ね

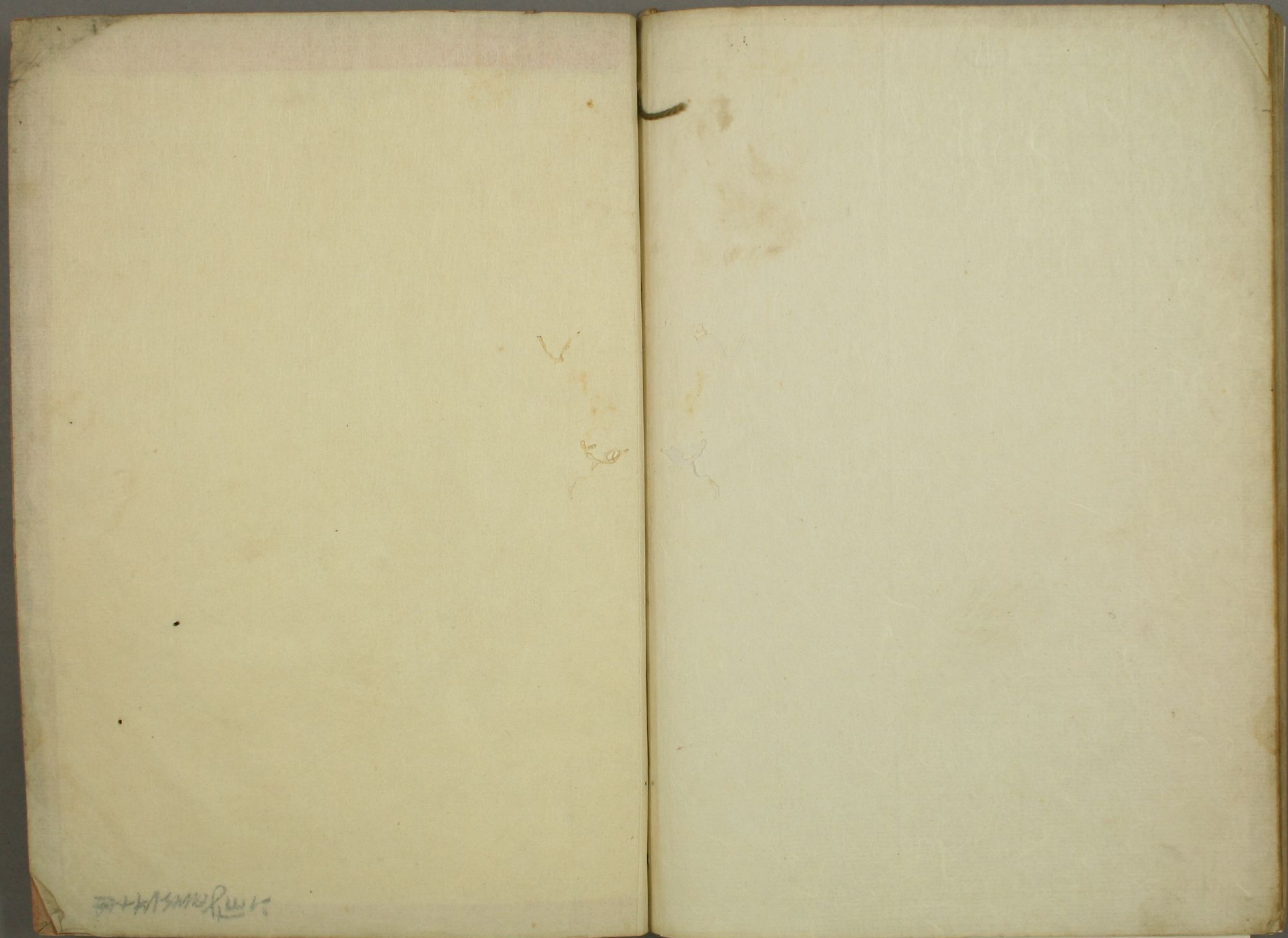
あはれに私に志願して、
之如く、堀川古き、
所又控へて、
へ侍り、
つふ、
書月、
内題、
空、
何、
う、

古今著書、繁則苦蕪雜、約則病不贍、
若宋牧法師撰善集、採擷精要、議論
簡易、可謂連社巨寶矣、得月樓主人嘗
藏其先考手摸古本、而又得德大寺内府公
及宋牧子宋養真蹟、旦夕校讎、章編三絶、
精備明悉、以校刻刷、其意俾學者咸知

其片言有體而隻句有法則主人惠後生
豈淺哉余與主人結髮相知唱酬路熟
其於此舉雖無所請余將言也

文化丙子花朝 東嶽樵夫司直梁





Wm. J. ...

